

ら易いお産となり、安産信仰を集めた。大正元年(一九一二) 現在地へ移転。なお高津宮社務所庭に、貞享三年(一六八六) 二代安井九兵衛(道卜) が奉納した石燈籠がある。三三

縁切坂 高津宮(高津一丁目) 本殿の西、絵馬殿から西へ下りる石段は、縁切坂とか去り状

坂とか呼ばれた。古くはふたくだりめがさらに曲がつて三くだりとなり、最後に道に下りる小さい段がついたので「みくだり半」(江戸時代夫が妻を離縁するときに書いた三行半の書状) といわれ、若い娘さんたちはここを下りるのを嫌った。逆に厭な男につけ回されると悪縁が切れますようにと高津宮に祈って、必ずここを下りる。明治に入って神社側が現在のように、絵馬堂をはさんで南脇と北脇の二つの石段に分け、一つに出会う形に改修すると、今度は相合坂と呼ばれ縁が結ばれるとなって、今でもアベックが別れて上り出会って手をつないで仲良く歩いている姿が見受けられる。三三

木谷蓬吟・千種碑 高津宮(高津一丁目) に

ある。蓬吟は文楽の五世竹本弥大夫の次男。神戸の貿易銀行に勤めたことから、質銀をもじって雅号を蓬吟とつけた。父の仕事から近松門左衛門の研究に没頭。大正時代に『大近松全集』を刊行して、現代の近松学に大きく貢献している。『文楽今昔譚』『道頓堀の三百年』などがあ

る。妻の千種は日本画家。池田蕉園に学び文展に入選した「針供養」で名をあげ、島成園と並ぶ大阪の女流画家として評判になる。大正九年(一九二〇) 蓬吟と結婚、今までの美人画に浄瑠璃や歌舞伎の題材を加え、一時代を築いた。千種は昭和二年(一九四七)、蓬吟は同二年(一九五〇) 没。この顕彰碑は近松の墓碑のあった法妙寺(谷町八丁目) に「近松研究会」が建立したが、同寺移転で長く保管されていたのを、近年夫妻の業績が高く評価され、高津宮に移設した。三〇

浄瑠璃人形の先祖 昭和六一年(一九八六) 高麗橋一丁目のビル建設工事現場から、人形の頭ばかり約百点がみつきり話題となる。地下二・五層ほどのゴミ捨場とみられる土壙から出

たもので、長さ一〇―一五センチほど。男の顔で角柱を削り墨で目と髭を描き胡粉を塗って彩色。写実的で文楽人形に似る。おかつば頭の少女二首も混じる。傀儡(人形を操る大道芸人) が扱ったものらしく、このあたりに製作場があったようだ。小さいものは子どもの玩具。三二

虎屋まんじゅう 大坂名物「虎屋まんじゅう」は、高麗橋井池筋(高麗橋一四丁目) 東南角に店があり、「虎屋大和太藤原伊織」と

白く染めぬいたのれんがかかっていた。初代主人は元禄一五年(一七〇三) 京の「塩瀬」で修業した男で、あんは他のまんじゅうよりはるかに多い目を入れ、上等の小麦粉を薄皮にして一個五文で売り出す。あんの材料赤小豆は泉州日根野の名産大粒の大納言、砂糖は上白、水は土佐堀川榎木橋北詰から汲み、かまどの薪も杵(こなら・くぬぎなど) 以外は用いない凝りよ

う、また皮を練る者は十二、三歳までの丁稚に限る。これは少年の手は柔かく薄皮がなめらかなで艶が出るからとの理由であった。保存して日数が経っても蒸籠で蒸すと、できたとときと変ら